

宣長サミット パネルディスカッション

「今、なぜ、宣長か」

コーディネーター：元新潮社	編集者	池田雅延
パネリスト：神戸大学大学院	教授	田中康二
	翻訳家	ピーター・J・マクミラン
國學院大學他	兼任講師	森瑞枝
本居宣長記念館	館長	吉田悦之

池田：池田雅延でございます。本日は、ようこそお越しくございました。何分にも、私、こういう役は初めてでございます、全く不慣れでございます。どの程度、この大役を果たせるか、おぼつかない限りですが、皆様のご協力をいただきまして、存分に十分な時間を作っていきたいと思っております。どうぞ、よろしく願いいたします。

では、今日の会の進め方ですが、最初はパネリストの方々に、今どういうテーマで、宣長さんと向き合っているかということと、今回のメインテーマであります「今、なぜ、宣長か」という問題に関してのお考えとをそれぞれ一言ずつ、まず伺ってまいりたいと思っております。その後で、それぞれの問題をより一層クローズアップして、出席者全員での討議に移るという段取りで進めてまいりたいと思っております。

最初は、田中さん、どうぞよろしく願いいたします。

田中：神戸大学の田中康二でございます。よろしく願いいたします。本居宣長の研究を普段からしておりまして、大学では文学部に所属しております。文学の方面から本居宣長あるいは国学というのを研究あるいは教育をしているところでございます。

それでは、時間ありませんので、早速始めたいと思うんですけども、文学の側面から本居宣長、国学を見るということで、あらかじめ与えられたテーマが「もののあはれを知る説」というものでございます。もののあはれを知る説というのは、ご存知の方も多いたと思いますけれども、この説の中身はそれほど深く知られていないと思っております。文学研究者を代表いたしまして、そのもののあはれを知る説について若干の説明とこの説の可能性のようなものを申し述べたいと思っております。

ポイントは3点でございます。

1つめは、もののあはれを知る説には『源氏物語』あるいは古典の和歌をはじめとする文学作品を読む際の心得としての文学論という側面がございます。『源氏物語』は、儒教の教訓あるいは仏教の真理などを教えるためのものとして書かれたという考えが当時、支配的でありました。例えば、仏教の因果応報の理という教えがあります。悪いことをしたら、地獄に落ち、良い行いを積ん

だら極楽に行ける、という教えです。その因果応報の理の教えを伝えるために、紫式部は『源氏物語』を書いたということです。ところが、宣長はこのような功利的な文学観を否定します。仏教や儒教の教えとは全く無関係に、『源氏物語』は読む者の心を震わせ、涙を誘うではないか、というわけです。文学は、宗教や教訓のために存在するのではなくて、文学それ自体のために存在する、という近代的な文学観を提唱いたしました。これが1つ目の特徴でございます。

2つ目の特徴といたしまして、もののあはれを知る説というのは知的な学説であるということです。宣長は心がうち震えるというような感動には、涙があふれるといった感情の側面があるのはもちろんだけれども、それ以前に、知的にこれを認識するメカニズムがあることを指摘しております。つまり、宣長が言っている例えですけれども、桜が美しいと感じるのは桜が咲いている様子を目で見て、知覚し、そこに美しい桜があることを頭で認識して、その上で、めでたき花かな、という風に思う心が生じるメカニズムを解き明かしました。感動の中核となる対象を頭で認識し、その後で心で受け止めるというメカニズムですね。50年以上前になりますが、小林秀雄は、このもののあはれを知る説を感情論ではなく認識論であると評価しております。いわゆる学者がこのようにことを指摘する以前に、こう言っているところが、非常に慧眼であったと思います。もののあはれの論というのは、もののあはれを知るの「知る」というところに知的な側面があることが重要です。インテリジェンスという言葉で言い換えてもよろしいかと思えますし、寺島先生はそれを「意識」という言葉で捉えられたという風に思います。知的な活動である、ということが2つ目でございます。

3つ目といたしまして、もののあはれを知る説には、人の痛みを理解する、共感する、という側面があるということです。他人の身の上に不幸な出来事がふりかかったときに、それを他人事ではなくて、自分の身の上に置き換えて人の悲しみに寄り添うことも、もののあはれを知る説というフレーズで説明しております。今でいう、思いやりですね。文学作品を読むときには、感情移入という言葉に言い換えることができます。このように、共感、思いやり、あるいは感情移入といった心の働きももののあはれを知る説の重要な役割である、ということが3つ目の特徴ということになります。

もののあはれを知る説は250年前に提唱された文学論の1つですけれども、それは文学論で終わる学説ではありません。特に、他人の立場に立って、人を思いやる心を持つという共感論は、近時の国際紛争を未然に防ぐという意味合いにおいても、一定の役割を担う可能性のある重要なものであると考える次第です。以上です。

池田：ありがとうございました。続きまして、森さん、よろしく申し上げます。

森：「今、なぜ、宣長か」ということは、つまり、「私自身にとって、なぜ今、

宣長か」、という問題でもあります。そこに立ち戻って考えてみたい。私は修士論文の研究対象として本居宣長を選びました。それから、ずっと、他にもいろいろなことを研究していますが、宣長のことを自分の学問の大黒柱と思っています。私は宣長について、自分に正直に生きた人、また、そうしようとするのが生きることそのものであった人、それを自覚的に普通に生きた人というイメージを持っています。

宣長の生涯を貫く重要なキーワードに「まこと」という言葉があります。この「まこと」という言葉も、私自身の生き方に即した問題として考えてみて、自分自身にまず正直であり忠実でありたい、簡単に言うと嘘をつかないで生きていきたい、ということだと思っています。とはいえ、自分自身に正直と言っても、もちろん一筋縄ではいなくて、いろいろな自分があるわけですね。自分の好きなこと、嫌なこと、大部分はどちらでもない。そうしたことのほとんどは社会的役割や周りの期待と絡みあっていて、こうありたい自分が、うまく合っていたり、合わなかったり、そもそもどうありたいのか、なかなかややこしい。誰もがそうした葛藤、状況をやりくりしながら生きているわけです。

宣長の生きていた江戸時代というのは、社会制度の圧力が今よりずっと強かった。なにごとにも身分制度が前提の社会ですから、そうした条件のもとで、安心して生きていくために、自分のいろいろな「まこと」と、もろもろの社会的役割とをうまく重ねることがそのまま人生の大目標になっていたと思います。ですので、江戸時代の、いわゆる思想と呼ばれるもののほとんどは、社会秩序を内面化するための方策です。それは要するに、政治思想なわけです。これは朱子学や儒学に限りません。うまくいって、壊れるとは誰も思っていない政治世界（その当時の徳川幕藩体制）の中で生きて行く、という前提にまずあって、その上でのアイデンティティの議論なわけです。

しかし、宣長という人は、自分の「まこと」の安心はとても大事だけれど、安心とは何かを掘り下げてゆくと、社会的アイデンティティと自分の「まこと」との調和や一体化の問題だけには収まらないということを自覚していたんだと思います。そういう一筋縄ではいかない「まこと」を見つめ、それが人間のありようであることを、理論的にちゃんと明らかにしようと、彼は考えていたんじゃないか。その問題意識が、歴史書とは別の、経典としての『古事記』を再発見させ、『古事記伝』という書物を実現させたのではないかと私には思えます。

この宣長の主著である『古事記伝』の構想は、なによりも『古事記伝』の書物の形、装丁、特にページのレイアウトに一目瞭然に見て取れると思います。

『古事記伝』には大字・中字・小字の三次元の書き分けがあります。いわゆる『古事記』の本文は一番大きな文字でパッとわかるように印刷されています。

それから、それに対する第一次元の注釈が、本文より小さい文字で印刷されています。さらに、もっと小さい字で第二次元の注釈、補注にあたるものが印刷されています。現在出版されている全集のレイアウトでは、この文字の大きさの違いはなかなかわかりにくく、一続きに見えてしまいますが、江戸時代の板本を見れば、次元の違いは一目瞭然です。

この文字の大きさの違いに、私は三次元の宣長を読み取ります。一番大きい文字はいわば「考古学」次元の、暗号文を整理分析する復元作業者の宣長。中字からは、時間を越えた古典世界で思索する宣長。それは哲学次元、神学次元の議論だと思っています。それから、一番小さい文字で書かれているのが、江戸時代という現場で生きている人間としての宣長が書いている注釈です。歴史的次元、政治思想としての社会的に条件づけられた本居宣長の見解が書いているという風に見えるんですね。この細字の注に、いわゆる漢意（からごころ）批判は頻繁に現れています。

ところが、近代の活字本ではこの三次元の違いが見えにくい。特に問題は第二次元の中くらいの文字が目立たなくなってしまうことなんです。私はこの第二次元の注を、古典世界の宣長の注として読み直しているところです。この第二次元の注を読んでいくと、宣長が禍津日（まがつび）という神を非常に重視していたことがわかります。この禍津日神は従来も宣長の神学の特徴だと言われてはいます。実際、『古事記』ではそんな目立つ神ではないんですが、宣長が第二次元の注でクローズアップしています。となると、漢意批判とは異なる次元の問題で、宣長の古事記神学の体系にとって重要な神といえます。さてでは、どのように重要なのか。

これまで注の次元の違いに無頓着だったため、産巢日神（むすびのかみ）の論述の中に禍津日神が埋もれてしまい、禍津日神があたかも産巢日神論の一部であるかのように読めてしまうんですが、そうでないと私は読み取っております。短い時間でそれを証明するのは大変なので、結論だけ先に言いますと、禍津日神というのは、それまで続いていた秩序世界を打ち破ってしまう存在なんです。禍津日神が荒むと、例えば、それまでの伊邪那岐（いざなぎ）・伊邪那美（いざなみ）の秩序世界が壊れてしまって、元には戻らない。それから、高天原（たかまのはら）での天照（あまてらす）の世界も一旦壊れてしまう。で、舞台は中つ国（なかつくに）に移ります。このように、世界の転換のところに禍津日神による破れが出てくるんですね。今日のテーマに即して言えば、この禍津日神を宣長が重視したというのは、目の前の秩序だけがすべてではない、それはどんな風に壊れるか、いつ壊れるかわからない、壊れてどうなるかはわからないが、きっとその次がある、別の世界が始まる、この破れ、禍（まが）というのは、1つの絶望ではあるが、全く別の可能性を開くものでもある、世界は変わりうる、あやしの最も最たるものが禍津日神だ、と宣長は『古事記伝』

で主張しております。最も注目すべき主張と思います。以上です。

池田：ありがとうございます。では、続きまして、吉田さん、お願いいたします。

吉田：本居記念館の吉田でございます。本居記念館を支えてくださっている方というのは、大きく3つに分かれるんです。今、ご発言いただいた田中先生あるいは森瑞枝さんのように宣長研究をしておられる方、つまり研究者の集団がおります。そして、今日もたくさんお見えですが、松阪の方、また三重県の方が本居記念館を支えている2つ目の柱です。そして、もう1つの柱は、本居宣長についてはほとんど知らない、これまで考えたこともない、という方たちなんです。考えたことない人たちが、どうして記念館を支えているのか、ということなんですけども、実は、私の仕事の6割近くはそういう方たちと向き合うことなんです。そういう方たちは、私たちから何かを言わなくても、向こうから来られるんです。来週来られる方からの問題提起を少しだけ読ませていただきます。この方は企業の方で、今後の企業経営において世界に通用する人材となるべく、世界の文明、思想、近代国家について学んだ後、日本人としての軸足を獲得するため、という風に書いております。6割の方の大半がこういう方たちなんです。つまり、海外進出しようとしている企業の最前線の方たちが、例えばこの塾の場合は、1年を通して、最初にまずイスラムから入って、キリスト教、仏教、最後は日本文化を勉強しています。この人たちが今から例えば中国へ、あるいは中近東へ、アフリカへ進出し、異文化と向き合う。それだけではありません。9月に全国の私立幼稚園の園長さんたちの前で私はそういう話をした。国内にも、実は全く違う世界観、異文化を持ち、価値観を共有できない人たちがいます。そういう方たちは、私たちは一体何なんだろうか、日本って何なんだろうか、ということを考えるときに、いろいろ探っていくと、最終的に本居宣長という人を1つ押さえておけば、日本というものが見えてくるんじゃないか、ということになってくるわけです。この前、ノーベル賞をとられた、カズオイシグロさんの報道をご覧になりましたでしょうか。カズオイシグロさんが大事にしている日本語の1つを「もののあはれ」とおっしゃいました。あれは、もちろん小津安二郎とかから入って来ているんだけど、そういう報道が出ると、もののあはれって何だろう、日本人の美意識って何だろう、心って何だろう、と思っていろいろ検索したり、人に聞いたりすると、本居宣長か、記念館に行けばわかるのか、という風になるわけですね。そういうような方たちと私たちは向き合っている。そういう質問を寄せたからって、すぐに記念館で答えが出るわけじゃないんです。宣長は『うひ山ぶみ』という本の中で、学問に近道はないって書いてある。近道はないって書いている人に日本文化の早わかりみたいに、本居宣長を勉強すれば、日本文化がわかる、なんて、そういうのを

求めても駄目です。ただ、本居宣長と向き合って、本居宣長が何に悩んだのか、何を考えて生きていたのか、なぜ松坂から離れなかったのか、三重県から離れなかったのか、ということを考えていくと、次第にそれが見えてくる。もう少しわかりやすく言いますと、みなさんコンピュータを使われますね。コンピュータは、ソフトウェアとハードウェア、この2つですね。先ほど、からごころって言われましたが、これは中国のものの考え方ではないんです。中国のものの考え方を日本人が受け入れて、それを使っているのがからごころです。だから、からごころ批判というのは、中国批判ではなく、中国のものを日本のものに勘違いしている日本人に対する批判です。つまり、エクセルやワードのようなソフトウェアを使っていると、コンピュータというのはエクセルとかワードだと思っている。そうじゃない。実はハードウェア。だから、時代が変われば、企業の方たちは、からごころに対してアメごころ、とみんな同じことをおっしゃいます。要は、特に戦後、日本はアメリカの考え方に完全に入っている。選挙の母体となるものも全部、アメリカから入ってきているわけです。いいものはどんどん取り入れていけばいいんです。日本というのは、共存共栄の社会です。今、DNAの研究がどんどん進んでいますが、日本人のDNAというのは、どうもあんまり混合しないで、それぞれの地域で、大陸だとか、南や北から来た人たちとうまくお互いに距離をとりながらやってきたのではないかと、現在のDNAの世界では言われています。ハードウェア、つまりこの国土に住んでいる人たちのベースになるものだけでは複雑化していく世の中や異文化と共存していくことができないから、ソフトウェアが必要なわけですね。そのソフトウェアが「からごころ」や「アメごころ」と言われているものなんですね。ですから、実は、今日のテーマの「今、なぜ、宣長か」というのは、私たちが毎日直面している問題なんです。ちょっと話しすぎましたが、私の答えとさせていただきます。

池田：ありがとうございました。それでは、マクミランさん、お願いします。

マクミラン：初めまして、マクミランと申します。先ほど、3人の方がお話をなさいました。吉田さんが話された「宣長について詳しく何も知らない」という6割に私は入りますが、私の拙い知識で少しご意見を申し上げたいと思います。

まず、私が考える宣長の魅力を3つ紹介していきたいと思います。

最初は、彼の生き方ですね。私から見れば、極めて日本的です。まずは恩頼（みたまのふゆ）。その中で、おかげや感謝の思いが紹介されていて、その図の中で、例えばお母さんとお父さんなど、みなさんのおかげで生かされている、というとても日本的な概念であると思います。実は、生かされているという言葉は英語にはない言葉なんです。私は父との間には様々な葛藤があったのですが、日本に来てそういうことを勉強して初めて親の恩という言葉

に出会ったんです。それは、私の人生を大きく変えた概念です。おそらく、宣長はそういうような元で生きていらっしやったんですね。あとは、みなあやし、です。すべてのものを不思議に思う心ですね。私自身も、詩人で絵を描いたりもしていますので、なるべくそのような心で人生を歩んでいきたい、見習いたいと思っております。あとは、あるがままの姿を感じ取るという精神性を主張しておられたと思うんですけども、それは、私から見れば、素直になる、ということですね。素直という言葉も、実は英語にはない言葉なんです。私が日本に来て、初めて身に付けた言葉です。そういう素直な精神性の宣長にもとても共感しています。私自身の専門は、日本の古典の世界を英訳して世界に広める活動です。私と宣長に一番共通しているところは、私も宣長も古典の世界を愛していることです。俳句は、とても世界的に広まっています。松尾芭蕉の出身地で言いづらいですが、私と宣長さんは俳句よりも和歌の方が日本人の精神性が現れているのではないかと思います。そういうようなところから、日本人が、私たちとどういうところが違うのかを1つ、和歌を通して紹介したいと思います。実は、『伊勢物語』を翻訳した時にすごい発見をしました。『伊勢物語』は伊勢神宮が由来であるという説もあるんです。『伊勢物語』の段の数は125段です。どういう縁があるかはわかりませんが、伊勢神宮のお社の数も125です。これから、2句詠みます。「世の中にたえて桜のなかりせば春の心はのどけからまし」今、吟じたのは、言祝ぐ（ことほぐ）精神は音に出すこともとても大事であって、たくさんの和歌が言祝ぐ、つまり、祝っているわけです。日本の美しい地名と自然と神々の世界ですね。この歌は、お花がなければ、静かに私たちは春を過ごせる。お花があることによって私たちは落ち着かなくなる、という意味です。それに対する返事が、「散ればこそいとど桜はめでたけれ憂き世のなにか久しかるべき」要は、この世の中にあるものはどれも、儂いものであるからこそ、愛でましょう。しかし、西洋の美学、西洋の文学は、永遠に生きるから愛でるわけです。シェイクスピアのソネットでは、「So long as men can breathe or eyes can see, so long lives this, and this gives life to thee.」要は、人間が生きている限り、みんながこの歌を詠む限り、あなたの美しさは永遠に生きます。モナリザやモーツァルトの音楽は、永遠に生きるから美しく思われるんです。けども、日本の精神性では、儂いからこそ愛でましょう。まさに宣長が書いたように、和歌を通して日本人の精神性をうかがうことができると思います。ありがとうございます。

池田：ありがとうございます。おひとりおひとり、本当に素晴らしいお話を聞かせていただきました。それぞれのお話を、これからひとつひとつ深めていきたいと思いますが、これだけ内容の豊かなお話をうかがいますと、今日のこの時間ではとても尽くしきれないと思います。それでも、せっかくだ

だいたお話です。できるだけ、より細やかに味わっていきたいと思います。

先ほどからご紹介いただいていますように、私は小林秀雄先生の本を作る係として先生のお宅に11年半通わせていただきましたが、その間の1番大きな仕事が先生の『本居宣長』という本です。このことを、この機会にみなさんにお話しすることも、今日の私の大きな役目だと思しますので、小林先生が宣長さんに関して、どういう風なことをおっしゃっていたかを、かいつまんでお話しします。今、お話しいただいた寺島さんも含めて、ここでお話くださったみなさんのお話は、今から私が申し上げる小林先生の宣長観、宣長像からしますと、それぞれに宣長さんの心、宣長さんの生き方を、まっすぐに受け取って、まっすぐに現代に生かそうとしていらっしゃる方々である、という風に小林先生はおっしゃると思います。そういう風に小林先生がおっしゃるような学問というのが、現代には行われていない、というのが小林先生の深い嘆きでした。この世に生まれて、私たちはいかに生きるか、いかに学問をするか、これが『本居宣長』という本の大きなテーマなのですが、その大きなテーマを小林先生が端的におっしゃっている言葉をご紹介します。昭和47年10月に、新潮社で円地文子さんの源氏物語訳を刊行しました。そのとき、刊行記念講演会を名古屋と大阪で催したのですが、その講演会の講師を小林先生にお願いしたところ、先生は喜んでお出ましく下さいました。「宣長の源氏観」という演題でお話しくださったのですが、冒頭で先生はこういう風におっしゃったんです。先生の講演の中身をほぼそのままみなさんにご紹介します。「本居宣長という人は学者です。しかし、この人の生涯には波乱という波乱はほぼありません。生涯、伊勢の松坂にじっと座って、勉強していた人です。波乱と言え、宣長さんの波乱は、全部頭の中にあっただけです。その宣長さんの頭の中の波乱たるや、ものすごくドラマチックでおもしろい。私は、そここのところに心をひかれて、宣長さんと今、一生懸命取り組んでいます」という風に話を進められました。宣長さんは学者で、現に小林先生が書いていらっしゃった宣長の仕事も学問論だったのですが、先生はこうおっしゃいました。「宣長さんは学者だけれども、今の学者、現代の学者とは全く違う、ということを、最初にしっかりと心に留めてもらわないといけません。どこが違うかということ、今の学問は、文科系・理科系を問わず、サイエンス、科学である。したがって、現代の学問で学者と言われる人たちは、何をやっているかということ、誰もかれもが何かを調べることに躍起になっている。調べることで、みんなが自分の地位を高めようと学問をしている。だから、私たちが、現代の学者さんに、先生、私はどういう風に生きていったらいいのでしょうか、この人生、どう生きればいいのか、と聞いても、先生は答えてくれない。先生はどう答えるかということ、僕は学者である、僕の仕事は調べることだ。だから、僕は、君たちの人生には何ら関係ないんだ、そういう風に現代の学者は答えるのです。現代の学問というものは、

それほど冷淡になってしまった。私たちの一番大事なことには触れません。僕らの一番大事なことって何ですか、僕らの幸、不幸じゃありませんか、幸せ、不幸せ、これが僕らの一番の大事なことじゃありませんか、私たち、僕たちはこの世に何年かだけ生きていて、幸せになれなかったらどうしますか、この人生をなぜ生きているのか、という意味がわからなかったら、どうしますか、そういうところに答えてくれないような学者は学者ではありません。宣長さんだけではなくて、あの時代の学者たちは、みんなそこを、人生いかに生きるべきか、どうやって幸せになるかということを一生涯懸命に考えて、それをみんなに一生懸命語ったんです。これが学問というものです。だから、今の学者さんたちがやっているのは学問ではありません」と、これだけのことを講演の冒頭でおっしゃって、それから宣長さんがいかにもののあはれというものと向き合ったかという風なお話を進めていらっしゃったんです。私が最初に聞いた小林先生の宣長観の一番端的な輪郭で、今でもしっかり覚えて、何度も思い起こしては、しっかりと胸に畳み直すようにしていますので、今日はこの機会にみなさまにご紹介しました。お聞きいただいたように、今日の寺島さんから4人の方々のご発言は、いかに生きるべきか、私たちはどうやって幸せになるか、という問題を、きちんと押さえてお話くださっていることを、改めてみなさんに申し上げたいので、今日の話を進めていきたいと思えます。

ひとまずここで、ひとくくりにしまして、もう1度みなさんにご発言をいただきますが、一通り、補足というような意味合いでご発言いただければと思います。発言したいと思われる方、恐れ入りますが、挙手をお願いします。じゃ、森さん、お願いします。

森：宣長が禍津日神を重視したことの意味なんです、みなさんもお承知のように、宣長は当時の社会と調和し、うまく生きていった人なんです。そういう人がこの禍津日神という神を重視したことの意味を考えるべきだと思うんですね。一応うまくいっている政治世界の枠組みというものがあるって、人々もそんなに不満には思っていないんだけど、宣長はそれが変わりうるということを考えて。私は、その想像力が、宣長のすごいところだと思っています。今の当り前だと思っている状況の外にどう出ていくか、それは本当に行き詰った時、次に踏み出すヒントになるのではないかと思います。

池田：ありがとうございます。パネルディスカッションというのは出席者の間で共同討議というように進むのが普通のパターンなのですが、会場のみなさんからご質問をいただいて、一緒に物事を考えていく手がかりにしたいと思えます。どなたかご質問がおありでしたら、どうぞお手をお挙げください。ご質問をいただきます。

客：先ほどの吉田さんのお話が非常に気になりました。3番目の、いわゆる宣長を知らない人たちがお越しになるのが非常に多いと聞きまして、来られる方

は、どんな情報源で宣長記念館を知るのか。また、宣長に関して、ある程度予備知識がなければ、なぜ生きるか、日本人はどういう思想を持っているか、ということについては、なかなか関心がいけないんじゃないかと思います。その点、わかる範囲で教えていただけるとありがたいです。

吉田：これはいろいろあるんですけども、例えば、伊勢の神宮が式年遷宮を行うと、多くの方が伊勢の神宮に参拝に行かれます。海外の方もずいぶん多くいらっしゃいます。その時に、みなさんがおっしゃるのは一体日本の神様って何ですか、ということなんです。神道論については森先生が専門なんですけども、日本の神、八百万の神について、きちんと説明したものを少し調べてみると、やはり本居宣長の『古事記伝』ということになります。それと、先ほども言いましたが、もののあはれですね。ノーベル賞を取った人が、もののあはれだ、とおっしゃる、あるいは小津安二郎が、私のテーマはもののあはれだ、と言われる。すると、もののあはれとは何だ、と検索すると、もののあはれを知るを本居宣長が提唱した、と出てくるわけです。ですから、ほんのわずかなワンクッションを置くだけで宣長の世界は、実はみなさんのまわりにあるわけですね。寺島先生が記念館に来られた時に一番感動されたのは、今記念館に出ていますけれども、宣長の世界地図です。やはり記念館に来られた人が、なんで松坂の医者が、しかも『古事記』や『源氏物語』を研究した人が世界地図を自分で写しているのか、という疑問を持たれる。という風に、意外と研究者層とは全く違うところで、本居宣長に出会われる人がいる。戦後、三重県に観光客が、しかも外国の人が来る目的は2つあるんです。1つは真珠です。やはり真珠の持つ価値は、ヨーロッパの人にとって非常に高い。そして、もう1つ、牛肉を求めて松坂に来られた人が本居宣長の名前を見たときに、どこかで聞いたことがあるぞ、という風になる。それから、丸山眞男、小林秀雄、というラインです。戦後の優れた知性をお持ちの方たちはどちらか、あるいは両方の洗礼を受けておられる。すると、なんで最高の知性を持っていると思われる丸山眞男や小林秀雄が本居宣長をやったんだ、という疑問をどこかで持っておられる。すると、松坂へ来た時に、じゃあ寄ってみようか、もあるし、もう少し意識的に記念館にメールを送ってみようか、という風になるわけです。

池田：ありがとうございます。もっとみなさんからご質問をいただきたいのですが、先ほどいかがだったお話の中で、私がさらに深く伺いたい点もありますので、お尋ねさせていただきます。

まず、田中さんは、もののあはれとその可能性ということで、もののあはれの性格を3点挙げてくださいました。心得としての文学論であるということ、知的な学説であるということ、それから、他人の痛みを理解するという説、共感、思いやりという思想ですね。そういう風な思想を持っているのは

宣長さんの世界ということでお話をくださったんですが、それを、「今、なぜ、宣長か」という問題から照らし出すと、もののあはれという認識は、紛争を回避する、それに対するきちんとした対応ができる、と最後におっしゃいました。その部分をもう少し敷衍（ふえん）していただけないでしょうか。

田中：もののあはれを知る説の中で、現在私が最も重要な概念だと思っているのは、共感や思いやりです。一般には文学論と言われるもののあはれを知る説の中に、人の痛みを自分の痛みのごとく感じる心が大切である、ということを書き込んでいることが非常に重要です。それこそ、いわゆる地政学的リスクと言われるものが、非常に危機的な状況にある中で、国境を越え、言葉を越え、文化を越え、宗教を越えた、基本的にはお互い他人同士の間でもって、きちんとそれぞれの立ち位置であったり、文化であったり、信条であったりを尊重しあうということがグローバルです。ローカルから出発した宣長ですけども、そういった主張が実はグローバル社会において非常に大きな意味をもってくるのではないかと思います。これは、いわゆる国際連合的なシステムの支えにもなるのではないかと、憶測する次第です。

池田：ありがとうございます。続いては、森さんに禍津日神について伺います。避けて通りたような、こちらに災いをもたらすものを禍といいますけれど、この禍津日神は、秩序というもので固まってしまったり、息苦しくなったりしている世界を打ち壊して、新しい可能性を招く、そういう存在であるという理解でよろしいんですね。そのあたりが、普段は聞けないお話だと思うんです。私たちは、どうしても心地よいもの、美しいもの、温かいものになびいてしまって、禍々しいものはできることなら見ないで通りた、と思うところですね。宣長さんの『古事記伝』『古事記伝』の文字の大小の付け方で読み取れる、というお話ですね。禍津日神をこれだけ強く訴えたかった宣長さんの気持ちをお話しいただけますか。

森：あらゆる宗教の源泉に死という問題があると思うんですね。人間にとって一番の謎、絶対突き止められない領域、未知の領域として死があります。宣長は、子供のころにお父さんが突然亡くなってしまって、自分の生活環境も一変して、そこから、すべて探って生きていかなくてもはいけなかった。もちろん、お母さんをはじめ、助けはあるわけですけども、やはり、この死というものが持っているインパクトは大変なものだったと思います。

死というのは、絶対に悲しいこと、とても困ること、状況を変えてしまう大きな力、そして、抗えないものですね。だけれども、そこから、また自分を打ち立てていった。その時までは、それなりにうまくいっていると思っていた状況が壊れてしまう、破れてしまうということは、誰だってとても耐えがたいことです。でも、宣長は、『古事記伝』の中で、破れる前までは想像もしなかったような違う場面に展開していくことが『古事記』で何度も描かれていること

をととても強調しています。禍津日神はそこに登場します。それだけではありません。『古事記』の中ではずっと後に出てくる神であるにもかかわらず、冒頭の、最初に登場する神様の三柱、天御中主神（あめのみなかぬしのかみ）、高御産巢日神（たかみむすびのかみ）、神産巢日神（かみむすびのかみ）の段の、高御産巢日神・神産巢日神を説明する中字の注に、やはりもつと後に現れる最高神の天照大神とともに、禍津日神の説明があるんですね。普通に『古事記』を流し読みしていたら、同列には出てこないはずの禍津日神をまず第一段の重要なところに出してきている。しかも、天照や神産巢日神と同格のようにして出していることは、宣長の神学を考える上で、特筆すべきことだと思います。でも、今の平板な印刷物で読んでみると、それが目立たないんですね。その他、禍津日神の荒びは天照大神でも止めようがない、抗えないものとして何度か出てくる。禍津日神が壊したものを直毘が元に戻すのではなくて、全く違う状況に転換していくんだということを注釈の中であとづけていることについては、いろいろ追究したいなと考えています。

池田：ありがとうございます。禍津日神という物事との向かい合い方、これも「今、なぜ、宣長か」という大きな糸口だろうと思います。今、森さんがおっしゃったように、活字本になると文字の大小の大きさが見えなくなります。宣長さんが自ら彫らせた『古事記伝』の版本をご覧になることで、今、森さんがお話くださった、それこそ宣長の息遣いというものを感じ取っていただけると思います。

そこで、次はマクミランさんに伺います。人間が幸せに生きていくために、そのことを一生懸命に考えて話した人、これが宣長さんだ、と小林秀雄先生はおっしゃいましたが、先ほどマクミランさんがお話くださったご経験は、まさに人間がいかにか幸せに生きていくかという心遣いについてのお話でしたね。お国で生活していらっしゃる時にはある1つの価値観があったのだけれども、日本へ来てみて、日本の心遣い、おかげで生かされている、というような日本の考え方に触れて、マクミランさん自身が自分の生き方というものを新たに身につけられた、というようなお話だったと思いましたが、そのあたりについて、ぜひ、もう少しお話をください。

マクミラン：はい、わかりました。宣長だけではないんですけども、日本に長年住んで、「和を以て貴しとなす」のような日本の精神性に少し理解が深まることによって、私自身の考え方と人との接し方は若干変わったんじゃないでしょうか。アイルランド人は、基本的には怒りんぼうなんです。そして、とても自己主張が強いんです。私たちは、とても正義が好きなんです。私も、それ以上に正義が好きなんです。生まれた時から、そういう人が多いらしいんですけども、何か正義ではないことに気づくことがあれば、それを主張せずにいられないんです。でも、日本は、どちらかというと正義より和を大切

にする文化だと思うんです。おそらく、世の中にはどちらも必要でしょう。「秘すれば花」という世阿弥の言葉があります。隠してこそ美しい、という意味で、それも非常に日本人の精神性に近いもので、そういう気遣いとか心遣いが大変美しく思う次第です。

先ほどの補足ですけれども、これからの三重県にとっての宣長の意味合いについて、外国人から少しだけ触れてもよろしいでしょうか。これからの三重県における活動の一つとして、ぜひとも宣長の素晴らしさを世界に発信していただきたいと思います。私自身の仕事は、『百人一首』や『伊勢物語』のような古典を英訳し、海外で出版することです。今、実は、『百人一首』の英語のかるたを作っております、12月にイギリスとアイルランドでかるた大会をやるんです。日本の和歌のかるたゲームをしながら、日本人の精神性にもっともっと理解が深まるかなと思っています。『百人一首』の中にも、精神性が凝縮されているに違いありません。また、日本人は何者か、と考えた最初の1人として、宣長がとても重要な方でおられると思います。私はアイルランド人で、アイルランドは約800年間、イギリスの植民地にされたんです。1916年に独立運動が始まりまして、1922年に初めて独立しました。その当時、W・B・イェイツという偉大な詩人がおりまして、彼は、宣長と同じようなことをアイルランドの国民にしてくださったんです。アイルランドの古代の神話や昔話を現代の劇場に取り入れるなどして、彼の詩の中で、初めて私たちアイルランド人がイギリスとは別の自分の国としてのアイデンティティを確立することになったんです。おそらく、宣長もそういうような志の始まりであるから、例えば、国づくりなどの上で思想ができてくる源となる、とても大事な人なんですね。

先ほど、和歌を通して日本人の精神性がいかに理解できるかを、句を紹介しながら、説明しましたがけれども、実は、もう1点の見方ができまして、それはまさに、先ほど、寺島さんの話にもあった、グローカリティです。三重の素晴らしさと宣長の素晴らしさを紹介することによって、また大きな架け橋になると思います。その1つの例ですけれども、みなさんご存じのように、倭姫命（やまとひめのみこと）が伊勢神宮に大神を鎮座して以来、ずっと平安時代の和歌に伊勢神宮が詠まれているわけですね。数えきれないほどの、言祝ぐの歌があるわけです。その1つを紹介します。「君が代は久しかるべしわたらひや五十鈴の川の流れ絶えせで」要は、その清らかな水の流れのように日本の皇室や伊勢神宮が永遠に途絶えない、ということです。この文化を世界に発信していくと、さらに三重の魅力が世界に理解していただけるかな、と思います。

池田：ありがとうございました。まさに、今、なぜ、宣長か、という中核のお話を拝聴することができました。

先ほど、会場の方にご質問いただいて、私も吉田さんに伺いたいと思って、いたことを先にお答えいただきましたけれども、この後、みなさんにご発言をいただいて、今度はパネリストの方同士で何かご質問をお互いに交し合っていたら、という形で広げていければ、と思います。そういう意味で、吉田さん、何かお三方のどなたかに、このあたりのことをお話してほしい、というようなことはありますか。

吉田：田中先生の『本居宣長の思考法』という本の最初に、研究と、小林秀雄などに代表される評論の2つが、お互いにうまく噛み合っていく中で、宣長の新しい解釈の世界が広がっていく、と書いてありました。評論は宣長に関心を持った人たちが少し勉強していく。でも、研究者の世界というものは、ある程度壁に覆われているように思いますけども、そういうところを、特に文学の側から非常に見識の広い田中先生に、ぜひコメントをいただけたらと思います。

池田：ありがとうございます。では、田中さん、お願いします。

田中：見識は広くないですけども。近代の学問というのは、非常に細分化されて、その分非常に深掘りができるようになった、という良い面もありますけれども、大学で、隣の研究室で何をやっているか知らない、というような、同じ学部の研究者であっても、そういうことが普通にあります。例えば、国文学というのは今現在、大きな学問領域からすると国文学と思想史という2つの領域の学者によって行われているんですけども、それが、相互に参照されることがない、ということがあります。これは、近代的なアカデミズムというもののある種の弊害でもある。良いところでもあるけれども、弊害でもある。同時代にある同じテキストを研究している人たちに、コミュニケーションの機会がないのは、やはりおかしいだろうと思います。研究者の世界でもそうです。ましてや、先ほど吉田館長が言われた、研究者と評論家、それぞれ書くものが相互に関連して、本来はその相互関連の中で高め合っていくのが良いと思うんですけども、それがなかなか難しいということもございます。前近代の未分化な状態に戻した方がいい、というわけではなくて、それぞれ細分化され、非常に厳密に学問が組み立てられていることを承知の上で、それぞれの最高レベルの知識をお互いにアップデートしていくことが大切なのではないかと考えます。

池田：ありがとうございます。森さん、今と同じ問題でも結構ですし、新たな発展をしていただいても結構ですが。

森：今の分類でいくと、私は思想史という方から入った人間です。本居宣長記念館を核にして、国文学研究の方たちが中心となって立ち上げられた鈴屋学会に入れていただいて、発言の機会もいただいて、これまでやって参りました。江戸時代の思想史研究は、ある思想の形成過程よりも結論の分析や比較

に傾きがちなので、生の資料から洗い直す必要に迫られないで済む面があります。国文学研究の精緻な調査・研究をフォローするのは大変です。なので、しかるべき校訂を経て活字になったものを信頼して議論します。

しかし、宣長には宣長自身の手による草稿やノートなど、生の資料が豊富に体系的に存在しておりました。なかなか大変だけれど、文献学の成果や国文学研究の視点を学ぶ、私にとって鈴屋学会は貴重な場です。そうした研究成果を踏まえた上で、宣長自身がデザインし、刷らせた当時の書冊や原稿などの生の資料を見ていくと、自分自身の考えの裏付けができます。思想の研究というのは、ちょっと評論、批評とも近いところがあって、自分の考えでこうだと言ってしまうがちな部分があるんです。すっきりときれいな文章で自分の考えを打ち出していくというのが批評家の批評ですが、思想史というのは、例えば、本居宣長なら、宣長の思想の解説をしています。と言いながらも、結局は自分の感想文にとどまっているんじゃないかという不安があるわけです。その自分の読み取りの妥当性を確かめていくには、やはり、そうした文献研究、文学研究の側の成果が非常に力になるということを私自身経験しました。

見識は広く、いわゆるアカデミックに限りません。これは現在の本づくりの話ですけれども、本作りに取り組んでいる方が書かれた理論書を読みまして、本の作り手がいかに本の装丁やページの取り方、組み方、文字の使い方といった設計に気を配っているか。さらにそれが読ませ方に直結していることを教えられて、『古事記伝』読解の大きなヒントになりました。単に昔の生資料を読むのがいいんだよ、というだけでなく、特に『古事記伝』の場合は、宣長が独創的に作り上げた設計なんですね。その設計思想から考えていくことが、そのまま思想の理解につながるという確信を得ました。ですので、なるべく目配りは広く持って、それぞれの成果に敬意をもっていきたいと思っています。

池田：ありがとうございました。本を作るという仕事で今日まで来た私としては、大変に目を覚まさせられるようなお話でした。ありがとうございました。

さあ、時間も迫ってきました。マクミランさん、最後に一言お願いします。

マクミラン：さっきの、日本に来てどのように変わったか、の補足ですけども、私、エージェントから今日の切符を日帰りを用意しました、と言われたんですね。伊勢に来るんだから、伊勢神宮にお参りしなくてはならないかな、と思って、たまたま私の28歳の弟子に話をしたら、まだ伊勢神宮に行ったこともないと言いますし、東大の医学部の先生からも今度海外に行くので、その前に何か日本文化を紹介してください、と言われていたんです。御礼をたくさん頂いて恐縮したので、その御礼を使って、2人を呼んで、明日、伊勢神宮の正式参拝をして、伊勢を5、6か所まわって、一泊温泉に泊まってきます。チャラで帰ることになるけれども、それは恩返しとして、地元で頂いたものを地元で使うという気持ちで参りました。そういう部分で少し自分が日本人に

なったのかなと思ったんですね。

そして、最後に、みなさんが大好きな宣長の歌を詠ませていただいてもよろしいですか。天照の太陽のおかげで、私たちは食べ物を頂くことができ、ありがたいことですよ、という意味の歌です。「たなつもの百の木草も天照す日の大神の恵えてこそ」よく、どんな吟じ方をしているのですか、と聞かれます。冷泉家とかいろんな流派がありますけれども、マクミラン流です。今日はありがとうございました。

池田：あっという間に時間が経ってしまいました。みなさんと一緒に過ごして参りました、このパネルディスカッション。本当に貴重な時間をいただきましたと思います。みなさん、4人のパネリストの方に大きな拍手をお願いいたします。本当にありがとうございました。私も長く小林先生の下にいられたおかげで、宣長さんにはずいぶん近づかせていただきましたけれど、こういう機会をいただいて、みなさんのおかげで、今日また、何歩も宣長さんに近づけたような気がします。こういう機会を与えてくださいました三重県のみなさん、本当にありがとうございました。